

妙教寺だより

第22号

(再刊号)

平成19年元旦

長樂 萬年



平成十九年

丁亥歳

元旦

年頭の御挨拶

妙教寺 第七世

順信院 日薫

荒木 英知



を語り、「お題目」を弘めながら、日々の信行生活に精進されていることでしょう。

また、護法護持の念厚くして、當山の興隆発展の為に皆様より、ご浄財喜捨を賜り諸行事のご奉仕など種々の高配に対し、総代護持会役員一同心から御礼申し上げます。

妙教寺だより再刊

昭和五十八年一月十五日創刊号から、平成元年八月十日二十一号を最後に諸事情で十八年間休刊いたしておりましたが、「妙教寺だよりの再刊」を望む声四方より起り、本総代各会役員の皆様方のご理解とご支援

を賜り、新たに「護持会編集部」の活動として、幾多の編集会議を開きながら、ここに、當山が正法護持の言説布教を目的にした「たより」をこれから定期発刊していくこととなり、正しい教えを受け取る事が出来る「教化伝導紙」として、ここに新たな一歩をふみだした。

一寺院の次世代への教化布教伝導紙である機関紙として「たより」を発刊いたすことができ、感慨無量の想いを禁じ得ません。

再刊にあたり、編集・発刊(広告)等、更には運営に携わってこられた多くの皆様の菩薩行に対し、読者は、益々「知見」を開き、信心を鼓舞して、宗風教育の徳化の妙益を薰し得られる事であるとう感じ、改めて敬意と感謝申し上げます

御生誕八百年

また、我が宗門が、宗祖日蓮大聖人御降誕八百年にむかつて、新しい宗門運動を起こし、「立正安国・お題目結縁運動」と名づけて、僧・俗一致団結、社会教化に乗り出したことは、まことに時宜得た、聖誕慶讃の強力な伝道布教活動に成ることは間違いありません。

二〇〇七年の新年を迎えるにあたり、新たな「魂の入れ替えの出発点」として、本年こそは、檀信徒の皆さんはじめ、世界中の人々が心の安らぎと平和な社会であるよう、お祈り申し上げます。

古来より、新しい年の挨拶の言葉は、日本人の魂の奥深くに秘めたる「言霊」の思いと不思議な力が宿り、人間としての真心を直に「み

たまにささげる」ことを表したものでしょう。

宗祖は「正月元旦は妙の一字の祭りなり。妙とは蘇生の義なり」と云われ「古い魂がうまれ変わり、霊界、自然界が妙法蓮華経によつて蘇生するように、新たな魂の門出を祝福します」と受とめたとき、言霊の奥の深さを感じます。



大聖人御生

たよりが目指すもの

お釈迦様から日蓮聖人へと委ねられたお題目の歴史を辿り、七百有余年の歳月

を超えて、妙教寺の檀越に受け継がれ、たもち続けられたお題目のご縁は、いま私たちに結ばれています。

「妙教寺だより」が目指すことは、現代に生きる自分を見つめ直し、未来へ正しく進むための仏道を確認するためのものであります。

真の伝道者とは

今後、御生誕八百年を迎えるあたり、正しい教化を受ける事が出来る「教化伝導紙」としての紙面質量の充実を図つて精進したいと思えます。

宗祖のお言葉に「行学の二道をはげみ候べし。行学たへなば仏法はあるべからず。我もいたし人をも教化候へ。行学は信心より起るべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ給べし。」諸法実相抄

と教示されていますように、宗祖への御報恩に僧俗一体で報恩の真を行じることが出来るように「一文一句なりともかたるべき、真の伝道者」として、初心の志を掲げることが、編集発刊に携わつていく者として、一層身を引き締める思いに駆りたてるものであり、その熱意によつて、當山が益々隆昌するものと期待します。

開創百五十年を迎え

最後に、宗祖御降誕八百年の記念すべき年をむかえるにあたり、私達日蓮宗は、全国日蓮宗寺院、福岡県の各寺院において日蓮大聖人の御遺徳をお慕いする報恩行として、各種の慶讃記念事業が営なまれております。

當山においても、殊に、明

治十二年開闢以来、平成三十六年に妙教寺の開創百五十年の慶節をお迎えします。

開基開創百五十年の聖日に向い、祖恩報謝の一端に擬せんと欲して、その「慶讃記念事業」を発願し、新たに慶讃すべき歳を迎えたいと存じます。

今後、諸事業に対してご本仏さまの慈悲と智慧をいただき、総代護持会役員会に時を計りご相談申し上げ、異体同心し僧俗一体にて、忍難慈勝の大神に報い邁進したいと存じます。

今後とも護法護持のため、檀信徒各位の一層のご支援ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。微衷を伸べ、年頭のご挨拶といたします。

南無妙法蓮華經

護持会会長

村上 卯三



法要後に挨拶をされる村上会長

平成十九年の新年を迎え明けましてお目出度うございます。檀信徒の皆様のご健勝とご繁栄をお祈り申し上げます、併せて寺門の興隆を祈念申し上げます。

「妙教寺だより」が途絶えて何年になるだろう、「圓頓寺たより」の教訓を受け再刊に立ち上がった、今度こそ檀信徒一同の協力のもと一人歩きが出来るよう育てて行き度い。

心の中に先祖代々から教

え込まれた日蓮大聖人の尊い教えを守り後世に受け継いで行く事が我々子孫の繁栄と檀家の発展につながる道であると考えます。

咲いた花を見て綺麗だなーと喜ぶなら咲かせた花の根つ子の恩を知れ、目に見えない土の中にあつて幹や茎をしつかりと支え養分をお送り続けている根が、御先祖さまです。

この報恩を忘れて自分の幸せの補償はないと知り一族の繁栄を願う御先祖さまの供養を人に教える事ではなく自分に教えその信仰を持つ事が大切な事なのです。

皆様と共に妙教寺発展のために尽力したいと一念を祈願してまいります。何卒宜しくお願い申し上げます。

合掌

謹んで新年のお慶びを申し上げます

平成十九年丁亥歳元旦

妙教寺 護持会会長

村上 卯三

甘木大安寺副住職

吉田 英守



元寇園教会合同団参にて

『再刊に寄せて』

この度『妙教寺だより』の再刊されることを、荒木住職上人よりお聞きし、あらためて私が編集を勤めさせて頂いた頃の『たより』を読み返してみますと、いろいろな事があったりと当時のことが思い出され、とても嬉しくなりました。

顧みますと、私が大学を卒業後、師匠でありました故

御前様(順忠院日貫上人)より、布教誌の発行とブラスパンドの再編成を計るようご指導を受け、昭和五十八年の正月、創刊から大荒行初行入行の縁を頂くまでの九年間『妙教寺だより』に携わらせて頂いた次第です。

新たな出発をする『たより』、より一層お寺と檀信徒の絆が深まり妙教寺様の発展に寄与されることを願っております。

私も、微力ながらお手伝いを惜しみません。また、編集に携わる皆様のご苦勞、低頭致します。どうぞ、日蓮聖人の「行学の二道を励み候べし。行学絶えなば佛法あるべからず。」の遺文を呈し、楽しく人生の糧となる様な『たより』を楽しみにしております。

婦人会会長

古賀 静枝

『順正院日賢上人』

第七回忌を終えて

八月二十日午後一時より本堂に於きまして英知上人の導師の下に四名のお上人で、厳かに日賢上人の七回忌の法要が執り行われました、例年にならない残暑の続く中、多数の檀信徒様で本堂一杯になり、数えきれないほど沢山の卒塔婆供養が奉納されました。

今は亡き、日賢上人への感謝の現れと、深く感銘を受けました。過去を振り返りますと、一つ一つが鮮明に蘇って参ります。

平成十年第二十七回海上施餓鬼で導師を勤められ、そのお姿が立派なこと、目

に焼き付いてはなれませんが、まさに、あれが最後になりましたが、そのときは、最後になるなど、思いも抛らないことでした。涙が出てまいります。

これからは、日賢上人のお姿を思い出しながら出来る限りご奉仕に努める様に心がけたいと思っております。

妙教寺の発展を祈りながら、婦人会長としての責任を果たして参りたいと思います。

婦人会の皆様のご協力をお願い申し上げます。

南無妙法蓮華經



厳肅に執り行われた日賢上人第七回忌法要

護持会事業担当長

臼井 義光



『私と妙教寺の出会い』 (亡き日貫上人のお導き)

「お前の様な奴は勘当だ！父のその一言で、北国（札幌）から、夜汽車に乗り博多駅のホームに着いたと同時に妙教寺に連れてこられました。

昭和四十八年、十八歳、浪人生、父の怒り顔、母の涙、期待にこたえられなかった自分への失望、挫折、当時の私の心は、人間不信でカチカチの

氷のようになって苦しんでいました。

そんな時、御上人様（英忠上人）、若上人（英喜上人）、英知上人、英典上人（当時高校生）、英守上人（当時中学生）をはじめとする妙教寺の方々とお会いしました。

御上人は、私の顔を見るなりすぐに百日修行（研修会）に参加する様指示されました、朝五時起床、読経、法話、掃除、菩薩行、夜の読経、大変忙しくつらい修行の毎日、始は、いやだな、やめたいと思いました。

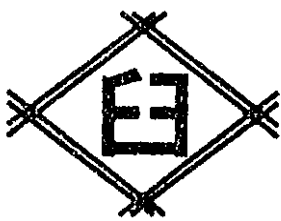
しかし、修行が進むにつれて私の凍った心は温かくなり、氷が解ける様に、そしてスポンジが水を吸い取る様に、スーッと御上人様の法話が私の心に沁みこんできたのを覚えていきます。

「自らの人生をすばらしい

物にしたいのなら、三法に帰依し、功德を積み、懺悔で悪業を清め、持戒をもつて徳の減少をおさえなさい、そうすれば、君の願望は成就し、絶対幸福になれます、さらに自我を滅し、大乘のころをもつて功德を積み続けるならば、この世のすべての事において、選択を誤る事無く、完全に苦しみから解放されるであろう。::それを解脱といい、悟りというのである」と教えられました、私は感動で心が震えました。

あれから三十五年経ち、現在私は、幸せです。もしもこの時に妙教寺の人々に会う事が出来ていなければ、きっと不幸だったに違いありません。

あの時代を今は亡き日貫上人、日賢上人、と共に生きてこれた事を、そして、これか



早い仕事より確かな仕事、技術と信用の

(有) 臼井組

建設業

〒811-2108 福岡県粕屋郡宇美町ゆりが丘 4-3-9 TEL(092)932-7397

易く教えて下さいと、お願いしたのが始まりでした。

今や山口様も、施餓鬼会、祈禱祭と参加され、二年を過ぎました。菩薩行にも、良く参加頂いて、今やこちらが感謝している次第です。

護持会が住職の取計いで、法人から独立し、一人歩きを重ね、妙教寺護持会として皆様の会費を以て、成り立つてまいりました。同時に信行会も成り立つてまいりました。

これは偏に住職上人、英典上人の御陰を得るところ大であります、いまや、会員さまも、三十人を遙かに超えています、感謝申し上げます。

皆様も、祈禱会后おときを頂戴し(おときは皆様が頂くのではなく、ご先祖さまが頂かれるものです。(これは、坊守様のお言葉です。))、十二時より、開催しております、

これは毎日の朝夕のおつとめに必要なお経の事だけではなく、日蓮宗とは、彼岸とは、ご先祖様とは、お盆とは、如何なる事か、英典上人が、毎回資料を作成され、上手に説教して戴き、住職上人がお暇の折には、貴重な説教を戴いております、一度拝聴されたら、その博学に驚かれるでしょう。

皆様と茶話会等を開いて、和氣藹々と開催しています、(聖語に「聖賢の二類は、孝の家よりいれたり。何に況や佛法を学せん人、知恩報恩なかるべしや。(日蓮大聖人御遺文開目抄より、引用、これは、今年のカレンダー四月号に掲載されています。)今年のカレンダーは日蓮宗より発刊しているもので、皆様の護持会費で購入し配布させて戴いたものです。

是非一度御家族の皆様とお揃いになり、お参りの上、ご参加下さいますれば、幸甚に存じます。

南無妙法蓮華經

妙教寺総代

花田 正月

海上施餓鬼に参加して

朝から大雨であった。海上施餓鬼大法要に、檀信徒の皆様を志賀島の海ノ中道の会場まで、車でお連れする役が待つていました。

例年、海上施餓鬼は博多湾から、船を貸切して、船上による海上施餓鬼として、執り行う慣例になっていました。

乗り物に弱い私は、参加を遠慮していましたが、ホテルで執り行われると聞き、参加

させていただいたのであるが、この大雨ではどうなることかと、心配しながら、妙教寺へ到着しました。

都市高速に入ったら、雨雨の高速でした、ノロノロと運転しながら、先ずは会場に到着しました。

会場にはまだ、数十人の人しか集合されていませんでした。今日のお世話頂く、お上人方が出てこられ、「この雨で集合が遅れています、しばらくお待ち下さい」と、館内に案内されました、それから約一時間くらいが過ぎ、皆さんがザワザワとしてき、お世話が頂く人も何と無く落ち着かない様子が見えてきました。

この雨では道路は混雑しているし、施餓鬼法要の開始は大分遅れるだろうと、腹を決めて待つことにしました。船上での施餓鬼だったら、

中止されるところでしたねと、話しながら、元寇の役の時も、こんな状態だったのだろうか、これも偏に、日蓮聖人のお導きで、会場をホテルに遷して頂いたものだろうと感謝しました。

約四百人近い人が参集され、当山住職、荒木上人が導師をお勤めされ、盛大に挙行されました。

県内の役職上人の挨拶に続き、当山、村上総代の提案による、全員で献花を、捧げ、無事終了しました。

雨はまだまだ、降り続いていました。

終了後、大安寺の檀信徒の皆様と一緒に、当山別院、元寇園教会へ参拝させて頂きました。

先週、ご宝前を改修していて、よかったなあと思いがながら、大安寺、妙教寺の檀信徒

の皆様とご宝前で、荒木上人を導師に法味を捧げました。

ご前様が元寇で亡くなった人の、霊をお祭りされているためか、亡くなった人々の「わだつみのこえ」が聞こえてくるようでした、海上はまだ、波も荒く、白波があちらこちらで立っていました、然し、施餓鬼によつて、波も静まって亡くなられた人々の心も静まっているような気持ちになりました。感謝、感謝、申し上げます。

春日市春日公園

川上 博之

〃信行会に参加して〃

毎月第一日曜日に行われている信行会に、昨年五月から参加させて頂いています。

私は日頃から日常の喧噪

から逃れて、何処か静かな所で〃お題目を唱えたり、お経を習いたい〃という思いがありましたので、偶然妙教寺様の「信行会開催」の掲示板を拝見し、即入会を決意した次第です。

入会以降約半年間毎月参加させて頂き、日蓮宗並に日蓮大聖人に関する様様な勉強をさせて頂き徐々にはあります、信仰心が深まってゆく様な気が致します。

信行会では、まず「自我偈」を中心としたお経の反復練習と唱題行を行います、この時は何もかも忘れて無心の状態になり、心が安らぐ貴重な瞬間です。

それから御住職上人より、日蓮大聖人の御遺文や経文を引用され、信仰の根本に関する御法話を拝聴し、改めて自戒の念と学習意欲が湧き

上がってくるのを覚えます。

引き続き高野上人より、日頃の信仰態度、仏事作法、お経の解説などを具体的に分かり易くお話頂けますので、中途半端な私の仏教知識が充実してゆくのを感じます。

新年を迎え今後とも〃行学二道〃に精進すべく決意を新たにしているところです。

最後になりましたが、信行会を運営頂いてるお寺さん、信行会会長さん始め、お世話役の皆様方に心から感謝申し上げますと存じます。



第35回海上施餓鬼供養会にご夫婦で参加された川上さん(前列右より)

日蓮大聖人のおくとば ①

立正安国論

汝早く信仰の寸心を改めて
速やかに実乗の一善に帰せよ。
然れば則ち三界は皆仏国なり。
仏国それ衰えんや。十方は
悉く宝土なり。宝土何ぞ
壊れんや。国に衰微無く
土に破壊なくんば。身は是れ
安全にして。心は是れ
禅定ならん。この詞この言。
信ずべく崇むべし。

(聖人三十九歳の著述)



立正安国論の献上

正嘉元年(一二五七年)鎌

倉には大地震があり、翌年は
台風、更にその翌年は大飢饉、
流行病等、日本国中に天変
地異が打ち続きました。聖人
は、その原因は、どこにある
かと考えられ、駿河の国(今
の静岡県)岩本の実相寺の
経蔵に入れられ、一切経を
閲読し世皆正に背き、人悉
く悪に帰するが故に、災い來
たり難起るとの結論を得ら



蒙古襲来(他国侵逼難)

れました。そこで文応元年
(一二六〇年)七月十六日、
国を安じる道は、法華経の、
み教を信じる他無いと幕府
に『立正安国論』一卷を献上
された。内に法然上人が布教
する念仏信仰を、お釈迦さ
まの教えを曲げるものとして
強烈に非難された為、聖人
とその門下はその後、多くの
迫害を受けることになりました。
(資料本より抜粋)

妙教寺各院紹介

寺宝

「三枚続御本尊」

昭和五十四年、当山へお焚きあげ供養として持ち込まれた物で、状態は非常に悪く、ボロボロに千切れたものでした。

当時の住職日貫上人が、何か強く伝わってくるものがあると感じられ、当時若上人日賢上人再々行入行中だった為、現住英知上人と圓頓寺総代早川先生の立会いのもと、専門家に鑑定を依頼したところ、京都大光山本圀寺第十七世鷲峰院日桓上人開頭の

御眞筆であることが解り、当山において新たに再表装をし現在の形となりました。

日桓上人は、慶長十六年（一六一一）六月二十四日、五十歳で逝去された肥後五十四万石の領主、加藤清正公の葬儀で大導師を勤められました。

又、京都大光山本圀寺は、

宗祖日蓮大聖人が御開山され、第二世を聖人本弟子六老僧の一人、大國阿闍梨日朗菩薩が勤められた、宗門史上最初の祖跡寺院であります。

（英典）



御霊屋に掲げられた日桓上人御眞筆の御本尊

『元寇園教会設立について』

日蓮宗 元寇園教会

日蓮聖人が法華経を弘められた御一代の尊い御仕事は、立正安国論に始まり龍ノ口の法難を経て、蒙古襲来に大成すと言われております。

日蓮聖人は蒙古襲来の二十有余年前に立正安国論を著され、鎌倉幕府に諫言されたのですが、果して予言適中し、蒙古軍は文永・弘安の再度に及び、博多湾頭に侵迫して来ました。

幸にして我が国は浸寇をのがれることができましたが、十幾万の蒙古軍は博多湾の海底に葬り去られ又、我が軍将兵の戦没者も多数に及び、数多くの悲惨なる史実を残

していることは、誠に痛ましい極みです。

この様なことから昭和二年五月、日蓮聖人門下の僧侶や信者等の有志により、蒙古軍捕虜二百余名の首塚や、海浜に漂着した遺体を埋葬した墓石の、あちらこちらに散在しているのを集めて改葬し、蒙古軍供養のための大宝塔“蒙古塚”が建設され、蒙古軍戦没者の冥福を祈り、今日に至りました。

それより四十年余りの星霜を経て、大宝塔の側近に法華経供養の道場を建立して、名実共に元寇の役彼我両軍殉難者の追善供養を勤め、日蓮聖人の立正安国の大願達成に報い、世界平和の実現に努め様と、同信の者相寄り、昭和四十一年八月供養霊場として、元寇園教会が建立されました。

「元寇園教会」歴代上人

○開山 小寺 龍辨上人

(順高院日彦)

昭和四十二年～五十三年

○二世 永野 見龍上人

(如雲院日不)

昭和五十三年～五十五年

東公園銅像教会主管第八世

○三世 花田 英喜上人

(順正院日賢)

昭和五十五年～平成十二年

○四世 花田 英忠上人

(順忠院日貫)

平成十二年～十五年

○五世 荒木 英知上人

(順信院日薫)

平成十五年～現在に至る

※「元寇園教会」は、本院「妙教寺」と同様、宗門に承認された寺院(教会)です。

史実からもわかるように、お祖師様の御心にふれることの出来る法華経の道場です。花木に囲まれながら、空気の澄んだ青空の下で菩薩行を試みませんか。広く皆様方のご参加をお待ちしております。(英典)



元寇園教会の全景

三沢お清正公堂

お堂建立の起源は詳しくはわかりませんが、当時、地元

の熱心な法華経信者が、お清正公様のご遺徳に肖りたく村のご守護神として祀られたと思われます。当山では、亡日貫上人のご出生地に近いこともあつて、幼少の頃よりお父上に連れられ、お参拝されていたことがあると聞き及んでいきます。その後も日貫上人、ご家族、地元信者から、当山檀信徒へと継承されてきました。その間、日貫上人、寺族方を中心に当山檀信徒参拝者方々のご尽力により御像の修復をはじめ礼拝堂増築工事・井戸掘り(現在は水道)等の境内整備がなされ現在に至っています。

※ 毎月第一日曜日月例祈禱祭並に信行会の後、午後より、定期参拝を行っております。

(英典)

檀信徒さん紹介

元婦人会会長

伊藤 ツヤ子 様

昭和五十八年より、平成四年までの間、当山婦人会の会長を、お勤め頂きました。

時、正に、日蓮聖人第七百遠忌記念事業の総仕上げとなるべく、本堂増築・御霊屋納骨堂増設を中心とした、一大事業の真つ只中で、護持会を始め各担当役員方に、多大な尽力を賜りました。中でもお寺参拝者の九割以上を占めるご婦人方の中心となり、婦人会会長として取り纏めていただきましたことは、此の記念事業達成に大なる力となり、昭和五十九年二月二十六日、当時福岡県修法師会会長、粕屋郡、蓮照寺、

故、竹内曜幸僧正を修法導師にお迎えし県内外のご寺院方十五名のご出仕を頂き落慶修法会が盛大に厳修されるに至りました。

伊藤さんは会長を退任された後も、日蓮聖人の生き方に学び、三大ご誓願である、我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん(開目抄)のお言葉に習い慈悲の心を以つて自ら檀信徒の手本となるよう身をもつて、行つて(色読)こられました。

日蓮聖人の「如説修行抄」等に色読について示されています。簡単に説明しますと、色読とは、法華経を口に唱えること、心で読むこととどまらず、身体をもつて法華経を読むこと、つまり法華経の教説を実践することです、伊藤さんは九十三歳のご高齢

になられた、現在でも、当山へのお参りは固より、お祖師様のご命日には、東公園へ報恩感謝のご参拝を欠かさず続けておられます。(英典)



東公園日蓮大聖人銅像100年祭にて

大野城市川久保 船越 順一さん

菊作りを始めて約二十年あまり、今では趣味の領域を越え、各地の菊花展に出品される程の腕前です。現在、独自の創作活動に取り組み傍ら後進の育成指導等幅広く活動されておられます。

写真(左)は、昨年秋(十一月一日から二十三日)に太宰府天満宮で行われた「第五十



「一文字」など見事な大輪の作品約1500鉢が並ぶ太宰府天満宮の菊花展



当山本堂玄関に飾られた船越さん作の菊(三色菊)

三回菊花展」でのスナップで船越さんが出品された鮮やかな「一文字」菊が、西日本新聞に掲載されたものです。(英典)

福岡市東区

高野 スミ子



元寇園教会の菜園で収穫をされる高野さん(右側)

『菜作り・花作り・心作り』

新年明けましておめでとう
ございます

今年より「妙教寺だより」
が再発刊になり、明るい年にな
るようお祈り申し上げます。

私達家族は日貫上人様が
妙教寺の住職になられた時
よりお世話になっております。
今のご住職様であります荒
木上人が小学校の五年生の
頃だったと思います。

信仰の篤い先代の日貫上人
と奥様のご指導を頂きなが
ら、毎朝五時の朝参りを長い
間させていただきました。

その頃より母は、妙教寺の
婦人会会長をおおせつかり、
十年の長きの間、勤めさせて
いただき、おかげさまで九十
四歳の長寿をまつとういたし
ました、私もいい年齢になり、
子供・孫・兄・姉・甥・姪・その
家族までお寺にお世話になっ
て、大変有り難く思っており
ます。

今は、別院である志賀島元
寇園教会にも、お参りや菩
薩行をさせていただいており
ます、元寇園教会は、蒙古軍、
日本軍、又、先の大戦で亡く
なった多くの霊を、おまつり
してあるお寺であります。

先代の日貫上人が竹藪を
切り開き、山をくずして、全
国各地から集められた、銘木

や、石で立派な庭園を作られ
ました。

一月にはいりますと、少し
づつ、紅梅や白梅が咲き始め
ます、梅の木は二十本以上有
りますが咲き揃いますと、す
ばらしくこれが天国の庭園で
はないかと、自然に合掌し、
心の中で、南無妙法蓮華経と
お祈りいたします、三月には
桃の花、四月は桜、五月はつ
じ、六月には菖蒲、と、四季
折々の花が咲きます、そこは、
毎日、諸天善神様・仏様・万
霊様が遊樂される場所でも
あります。

そんな元寇園教会であり
ますので菩薩行をしております
すと、心の入替えが出来、す
がすがしさと楽しさで、胸が
いっぱいになります。

庭等で咲いた花は、妙教寺
の御宝前、元寇園教会の御宝
前にお供えさせて頂いております。

ます。

二年前より、住職上人様を
はじめ、いろんな方々のご指
導を頂きながら菜園を始め
ました、今は、白菜・大根・水
菜等を植え、青々と大きく
なるのが楽しみです。

先日は、婦人会会長の古賀
さんはじめ、役員の皆様で玉
ネギを二千五百本植えてい
ただきました。収穫が楽しみ
です。

今年より「妙教寺だより」が
再発刊されますので、いろい
ろと皆様に元寇園のことをお
伝えたいと思います、皆様
方も広々とした元寇園に來
られ野菜の種まきや、花を植
えたりしてみませんか、本當
に心がなごみ、菩薩行のあり
がたさが実感されます。お待
ち申しております。

南無妙法蓮華経

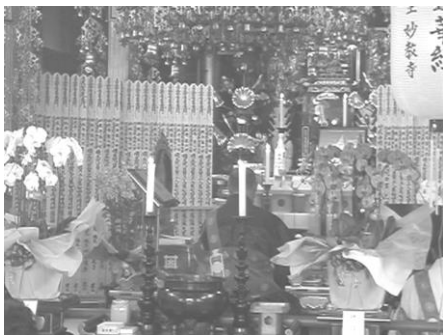
写真で綴る
平成十八年七月～十二月
行事報告



海上施餓鬼で献花をする
当山檀信徒の皆さん
(参加者 36名)



7月19日(水)海上施餓鬼会大法要
於 海の中道ホテル
御導師を勤められる当山住職上人



8月20日(日)順正院日賢上人
第七回忌法要(盂蘭盆施餓鬼法要中)
於 当山本堂



7月19日(水)大安寺様と
合同参拝後元寇園教会広間
での茶話会(参加者 55名)



10月8日お会式法要のための
婦人会並に有志によるお花作り
(参加者 15名)



9月29日(金)門中会お題目のつどい
於 甘木 本證寺様(参加者 20名)



12月27日(水)御宝前他、各お堂
お正月「お供え餅、もちつき会
(参加者 20名)



12月17日(日)年末煤払い大掃除
皆様ごくろうさまでした
(参加者 50名)

檀信徒投稿覧



春日市若葉台
竹森 満國

『晩秋の伯耆大山』

佐陀川の賽の河原をかこむ
元谷の紅葉は、美しかった、伯耆大山は（鳥取県）艶やかな晩秋の紅葉に彩られた巨大な錦絵の上に、どっかりと屹立していた。

十一月初旬、初雪の前の大山に登った、大山寺橋を渡つてすぐ、左の登山道の樹林に入る、間もなく朽ちた宿「蓮浄院」があった。妙教寺からいただいている亡妻の霊位は蓮

浄院である、懐の妻の写真をそつとおさえて、一抹の感慨がひそと、にじみでるようであった、蓮浄院は、大正三年頃に志賀直哉が滞在し、あの「暗夜行路」を書いたことで知られている、時任謙作の苦悩は、この宿坊で表現されたものであろう、大正の文豪の文を、今におきかえてみるとどうか、混乱と不安の連鎖が続く時代、まさに暗夜行路である、そんなことを考えながら、急峻の登り四時間に挑戦したのであった。

見あぐれば
大山の壁屹立し

見おろせば

燃ゆる紅葉の谷



編集後記

『妙教寺だより』の再発刊にあたりましては、住職上人を始め、檀信徒の皆様に変なご足労をおかけする事が多々あるうかと思っておりますが、皆様のご理解とご協力なしでは素晴らしい広報誌を作ることとは出来ません。

『妙教寺だより』を一回でも長く続けていくために必要なことは、企画力でも編集力でもありません。

いかに檀信徒の皆様が、情報を提供し、共有して頂く事が出来るかで紙面が充実し、魅力あふれる『妙教寺だより』が生まれて来るものと思っております。

再発刊の初版の感想は後日かかうとして、文章を書くことは簡単なようでも中々

難しいものですが、ど素人の私共広報委員一同、皆様から積極的に情報を頂きながら、「継続は力なり」の信念で、より良い『妙教寺だより』の編集に努めてまいりたいと思っておりますので、今後共宜しくお願い申し上げます。
(白水 岩人)

『妙教寺だより』編集部

- 発行責任者 荒木 英知
- 編集部顧問 村上 卯三
- 〃 高野 英典
- 編集部参与 古賀 静枝
- 編集委員長 植村 俊親
- 〃 副委員長 白水 岩人
- 委員(会計) 花田 正月
- 委員(広報) 白水 敏幸
- 委員 臼井 義光
- 委員 川上 博之
- 委員 小林 あけみ
- 委員 員 松尾 勝博
- 委員 員 高野 英一

平成十九年行事予定(一月～七月まで)

◎一月一日(月)

・初参詣祝祷会

午前一時より

◎二月四日(第一日曜)

・節分追難会

午前十時より

◎五月二十七日(第四日曜)

・各家勸請守護神祭

午後一時より

◎一月一日～三日(月～水)

・新春三ヶ日一部経読誦会

午前九時より

◎二月二十五日(第四日曜)

・月施餓鬼供養会

午後一時より

◎六月二十四日(第四日曜)

・月施餓鬼供養会

午後一時より

◎一月八日(成人の日)

・各家勸請守護神祭

・開運星祭り

・年頭施餓鬼供養会

・新春福引き大会

午後一時より

◎三月十八～二十四
(日～土)

・春季彼岸棚経廻り

・春季彼岸施餓鬼供養会

午後一時より

◎七月二十九日(第五日曜)

・土用丑の日秘法灸大祈禱会

・月施餓鬼供養会

午後一時より

◎一月二十一日(第三日曜)

・寒修行(婦人会主催)

午前十時より

◎四月八日(第二日曜)

・花まつり 釈尊降誕会

・月施餓鬼供養会

午後一時より

◎毎月 第一日曜日は

・月祈禱祭(午前十時より)

・信行会(正午より)

・三沢清正公堂お参り

(午後より)

《御霊屋・納骨堂 加入者募集》

○近代的格調高い

○耐久性にすぐれる

○御先祖様をおまつりするの
に相応しい荘厳な佇まい

※一時払い不可能な方は、分割払い制度をご利用下さい

※くわしくは、お寺又は護持会事務局までお問い合わせ下さい。

春日山 妙教寺 092-581-1266

〒816-0935

発行所 非売品
大野城市錦町二丁目一番二十七号
春日山 妙教寺

〇九二(五八二)二二六六